

A. ヴィヴァルディ(1678-1741)

チェロ協奏曲 二短調 RV.405

ヴィヴァルディのおびただしい数の作品(その数は 450 曲とも 550 曲とも言われる)の大部分は、さまざまな楽器のための協奏曲で占められている。これらは当時のヨーロッパで一世を風靡し、そのスタイルは「ヴィヴァルディ・タイプ」の名で、多くの聴衆のみならず、作曲家にも多大な影響を与えた。中でも、バッハがヴィヴァルディの作品を熱心に研究し、その協奏曲をチェンバロやオルガン用に編曲したことは有名だ。

ヴィヴァルディがチェロのために書いたソロ協奏曲は 27 曲、そしてソナタは 9 曲あり、チェロのために傑作を残したバッハと同じく、この楽器の独奏楽器としての可能性に関心を寄せていたことがうかがえる。この二短調の一曲は、激情が迸るトゥッティに独奏チェロが表情豊かなエピソードを挿みながら進む第 1 楽章、愁いを帯びた旋律を切々と歌う第 2 楽章、きびきびとした音の動きを交代させる第 3 楽章のいずれにも、チェロの力強い技巧と歌謡性が効果的に生かされている。

第 1 楽章アレグロ、第 2 楽章アダージョ、第 3 楽章アレグロ

リコーダー協奏曲 ハ長調 RV.443

ヴィヴァルディが活躍した時代は、縦笛のリコーダー(ブロック・フレーテ)が横笛のフルート(フラウト・トラヴェルソ)に取って代わられた時期であり、ヴィヴァルディもこれら両方の楽器のために作品を書いているが、このハ長調の協奏曲は、フルートでいえばピッコロの音域をもつソプラニーノ・リコーダーのために書かれた作品。ヴィヴァルディはこの楽器のために 3 曲の協奏曲を作曲しているが、いずれも華やかな技巧に彩られた作品となっている。ヴィヴァルディが教えていたピエタ音楽院の少女たちは、一人でいくつもの楽器を演奏したというが、どの楽器も相当の腕前だったらしい。この曲に聴かれる、まるでヴァイオリンのようなリコーダーの機敏なパッセージからも、その技術の高さはうかがえよう。

曲は、第 1 楽章アレグロ、第 2 楽章ラルゴ、第 3 楽章アレグロ・モルトの 3 楽章構成。分散和音や急速なパッセージを駆使して推進力あふれる音楽が展開される第 1 楽章や、トリルやトレモロの動きがきらびやかさを演出する第 3 楽章に対して、第 2 楽章では哀愁を帯びたメロディに細やかなメリスマが施され、リコーダーの音色が見事に生かされている。

A. マルチェッロ(1684-1747)

オーボエ協奏曲 二短調

映画「ヴェニスへの愛」のタイトル・ミュージックに使われて以来、この曲の第 2 楽章アダージョは大変ポピュラーなバロック名曲として親しまれるようになったが、古くはバッハによるチェンバロ用編曲をはじめ、様々な形で愛奏されてきた曲である。アレッサンドロ・マルチェッロは、ヴィヴァルディと同時代のヴェネツィアで、作曲家としてのみならず数学者、哲学者としても活躍した人物で、弟のベネデットとともにすぐれた作曲家として認められていたが、バッハ編曲の原作者が誤ってヴィヴァルディと考えられていたように、その存在は長い間忘れ去られていた。この曲が正しく紹介されるようになったのも、20 世紀になってからのことである。

曲は、第 1 楽章アンダンテ・エ・スピッカート、第 2 楽章アダージョ、第 3 楽章プレストの 3 楽章からなり、聴きどころの第 2 楽章では、哀愁に満ちたカンティレーナに施される装飾に、独奏者の個性とセンスが表れるだろう。

J.S.バッハ(1685-1750)

ブランデンブルク協奏曲 第2番 ヘ長調 BWV.1047

バッハは若い頃からアルビノーニやヴィヴァルディの作品を通してバロック協奏曲の研究に精力を傾けたが、その総決算ともいべき作品が1721年にブランデンブルク辺境伯に献呈された6曲の合奏協奏曲〈ブランデンブルク協奏曲〉である。多彩な編成と高度な演奏技術を要するこれらの協奏曲は、数多くの世俗器楽曲が生み出されたケーテン宮廷楽長時代(1717~23)に、すぐれた演奏家を擁するこの地の宮廷楽団のために作曲されたものと考えられている。

この〈第2番〉では独奏楽器に3つの管楽器が登場し、高音域を高らかに吹き鳴らすトランペットの技巧が冴える、華やかな響きの饗宴となる。典型的な合奏協奏曲のスタイルによる一曲で、独奏楽器群にトランペット、リコーダー、オーボエ、ヴァイオリン、そして総奏はヴァイオリン2部、ヴィオラ、ヴィオローネ、通奏低音(チェロとチェンバロ)の編成。急-緩-急の3楽章で構成され、両端楽章ではトランペットが妙技を見せる。

第1楽章(アレグロ)、第2楽章アンダンテ、第3楽章アレグロ・アッサイ

曲目解説: 柿沼 唯(作曲家)